

私の保育



私は歩いていて、ぼっと浮かび上がった事を考えるのが好きです。好きというより、それをふくらませて楽しんでいると言った方が適切かもしれません。

幼い頃、お店に飾ってある、まりが欲しくなり、買ってもらおうとびよんびよんとびはねて帰りました。もう頭の中には白いゴムまりがすっぽり入っていて、手で弾ませたり、スカートに、「おっかぶせ」をしたりしています。すでにその時、外界とはまったく遮断された状態だったのです。すぼっとどぶに落ちて我に返り、恥ずかしい思いでやっと家に着いたという記憶があります。もし、どぶがなくて、家ももっと遠かったら……なんて考えます。

水野行恵

最近でも、こんなことがありました。道ですれ違ったおばあさん、どこかで会ったような気がするのです。しばらく考えて、思い出しました。小学生の時、何回も夢に出て来たあの恐いおばあさんに似ていました。いつか夢でなくてこの目で、しっかり見たいと思っただけに、うれしくて胸が痛くなりました。「何でもすぐ良くなる薬をあげるから、こっちへおいで。」と手招きした、不気味なおばあさんが今は、気だてのよさそうなやさしいおばあさんに変わっています。荒ら屋の格子戸越しに見えた陰うつさが、なぜか明るい陽射しで消されています。何か変だなと思った瞬間、縦看板に当たり、本当にまた、真暗になりました。

この二つは痛い思いで中断されましたが、うれしい中断もあります。幼稚園の先生になって五年目。子ども達が帰ってからの掃除は手際よくなって良いはずなのだが、同じ時間を費してしまふ。棚をかたづけながら、今日作った紙粘土のハムスター、へび、おばけなどを一つ一つ見ては一人一人の顔を思い浮かべる。ロッカーからとび出しそうな紙切れを入れ直そうとすると、可愛い毛虫の親子だったりして、そつと元のようにしまっておく。また、いつも穏やかなSがけんかの助け手として入り、なぜその後泣いたのだろうと考える。そばで全部を見ていたMに、もう少し早く気づけばよかったと反省する。そこで、「お茶にしましょう」と声がかかり、部屋

のことは切り上げ、教師六名が集まる。一休みして、子どもの事で、雑談が始まる。この雑談は、出会えなかった子の行動を知ったり一人の子に対する見方の違いに気づき、改めて考える材料にしたりする。この時間もかたづけの時間とは違った意味で大切にしている。

もちろん考えようとして考えることもあるが、このように潜在的に気になっていたことや、興味、関心を強く持っていることは、自然に考えてしまうようである。そして歩いている時とは限らず、思考の転換ができればよいのは動いている時

で、回りからの刺激や変化があるとより容易になる。

私のものの見方や考え方は、私の生活となり、その中に繰り返される保育に当然表われる。ここで私なりの子どもを観て考えてみたい。

《一個の人間として、その子だけの持つ自然な姿がでて、生かされていること》子どもがそうあって欲しいということとは、逆に私自身がそうならなくては、ということになる。簡単そうにも思えるが、これがなかなか難しい。次に、二人の生活の例をあげ、考えてみたいと思います。

○年少、年長と続けて見ている女兒Aは穏やかな子である。入園当初は、挨拶をきちんとし、何でもやってみたくて意気込んでいた。しかし、友達の中でどのように行動していくかとなると、まったく手が出ない。家庭で同年齢の子との接触が少なかったので、友達に少し言われたことが、もう絶対のように受け止められていった。そして友達が大きな存在となり、強い関心を示しながら傍観が続く。印象的だったことは、入園して三日目に、誰も遊んでいないジャンブルジムに、一人で天辺まで登り、幼稚園全体をじっくり見ていたことで

す。今いる所は、どんなところか自分の目で確かめることによつて、新しい環境での不安を取り払おうとしていたのかもしれません。絵を描くことと、折り紙製作はするが、砂には手を触れようとしない。Aの兄のことを話題にした時、「知っているの」といううれしそうな表情をしたが、それで終わってしまった。私との関係は平行線だが、幼稚園をいやがらないので、しばらく様子をみようとした。相変わらず、友達との関わりはもたない。

六月に入ったある日、こんな気持ちのよい日は散歩したいなと思ひ、すぐ子ども達を誘う。十人前後でAもなぜか後からついてくる。Aの家は近いので、その方向へ足を弾ませていく。私が「Aちゃん、お友達にAちゃんの家、教えてあげようか」と言うと、一瞬ためらったが、駆けて行って、「ここだよ」と照れながら指さす。少し興奮もしていたようだ。Aが、友達の中に入ったような気がしたが、それは錯覚で、一人遊びは続く。しかし変化したことは、回りの活動をたえず見ているが、傍観ではなくなったことである。女児Bは、ポスターカラーで一緒に絵を描くうち、親しくなれた気がしたのか、Aに、「お友達になったんだもんね。」と話しかける。「うん」とAは答えているものの、心は全く開いてい

ない。ふらっとその場を離れ、一人になる。私には興味を示した時だけついてくる。図書室で絵本を数人で見て、その後一人が、ダンスをしたいと言ひみんなで踊ることになった。後からついてきて、流れに乗ってしまったらしく、初めてフオークダンスを、ほんの少しだけ踊る。すぐやめて囲りを見る。私も目が会ったので、それでいいのよという気持ちで微笑むと、微妙な表情をしたが、ほっとした様であった。スキップをしながらその場を去って行ったので、こんな状態で夏休みに入る。

二学期は入園当初に戻った様に感じた。夏休みは、家庭という環境の中でA自身の生活となり、幼稚園が始まることで緊張する。しかし入園の時とは構え方が全く違う。柔らかなのです。囲りの子の遊び、特に関わり方を一つ一つ体に溶かし込んでいく。「ああ、そうか、そこまではできそうなのだ。」という様に。A自身の活動はというと、ゆっくりと折り紙製作や、家の絵を描き続ける。二学期半ばにAを観察したという方が週一度見える。見られていると気づくと、Aの方から、「どうしていつも来るの」と話しかけた。以来話すことが楽しくなり、待っていたとばかり、自分の事などを話し始める。私はこの時、気にはかけながらも、いっしょに遊

ぶということをしていなかった。この頃、家だけの絵に、雲や草花が、描き加えられるようになり、友達から誘われると、庭やホールに出てゆく。

Aにとって三学期は、居場所が見つかり、除々にはあるが、自分の活動を見つけてゆく時となった。空いているブランコに乗って、私と目が会うと手を振り、砂遊びをしている友達の後、そっと座り込んで、砂を恐る恐るさわろうとする。みんな上手におだんごを作るのを見て、「私、おだんごできないもん」と言う。私は、「いいじゃない、できなくとも」とストレートに答えてしまっていた。すると、砂集めを始めるので、私もいっしょにしばらくの間、砂集めをする。どうしてかはわからないが、暖かくなってくる。この時、「何でもやりたいこと、しっちゃえばいいんだ」という暗黙の空気が、Aと私の間に流れたような気がした。この頃、家の中に自分が必ずいる絵を描いていた。

年長になると、指人形のおばけが気に入って、家を作り、食べ物を選んで、椅子の上で新しい遊びを始める。おもしろそうと仲間が集まり、増えてゆく。楽しそうに話しながら、時々赤ちゃん言葉にもなったりしている。六月の中頃、初めて、家のドアを開き、女の子が外に出てきた絵を描く。

この時、津守先生の、「保育の体験と思索」を思い出し、驚いてしまう。今、Aは、自分から心の窓に開き、自分の姿を見出しそうとしているのではないかと考えたからである。

まだ本当ではないかもしれない。自然ではないかもしれないが、精一杯歩んできたAに感動する。逆に、私はAに何をしてきたかを考えると、ずっと見守っていたとしか言えない。気にはかけていたが、私の心と体が、Aだけに、どれだけ向けられていたか、そして、その時、私の心と体は柔軟で、ずっと入り込める状態であったかを考える。頭の中にあるだけで、直面していなかったと反省する。子どものコンデイションのことを私はよく言ってきたが、大人である私にも言えることだとこの時気づく。

二学期から、徐々にAに対して、見方を決め始めていた。何度か、誘ったり、近づこうとしたが、Aは、他からの刺激は、溶かしていくものの、前には出さず、後ろに退く行動をとると感じたのです。その時から、「待つてみよう」と、姿勢を変えた。ただ漠然と待つのではなく、毎日の変化に気をつけながら……。待つことの心細さ、不安が、時々、私を、「何かしなさい」と声かけたが、Aを信じて待った。今、次の段階にきていると思う。

Aにとつての発達（自分を出していくという点で）は本當に、なだらかな坂を一步一步登って来たように思う。

。六月に入って登園拒否をおこした、年少女兒Bは、Aとは對象的に感情を表現する。何でも、「イヤダ」と言つて、一日中泣く。しかし手を握られ、私といられれば安定し、次の日は得意気に鉄棒の前回りをする。数日し、また泣きながら登園。「お母さん、病氣だから、看病しなくちゃ」と必死に帰ろうと抵抗する。そばにいと落ち着き、甘えてくる。また、にこにこ氣持ち良く、遊ぶ日が続いたかと思うと、「誰も私と遊んでくれない」と言う。絵を描くのが好きなので誘うと、塗つて楽しむ。今度は、ポスターカラーの容器を洗うと言ひ、自分の氣持ちまで洗つている様であつた。私がお礼を言つと、誉めてもらいたくて、毎日でも容器洗ひをする。やはり、何かを洗淨しているように見うけた。自分が役に立つた、認めてもらったということ、満足したようだった。

二学期も時々、泣いたりしたが、甘えも出してくる。「くつ置く所わからない」とか、どうもなつていないのに、「ここ痛い」と言つたりした。一つ一ついいねにみてあげ、い

つしよに砂遊びをすると、Aとは比べものにならないほど、ままことが大きく広がる。

三学期に入ると前（Aに話しかける）以上に友達との接触を求める。しかし、直接的で長続きしない。砂遊びをする時は、どんな友達とも自然に話し、じっくり遊び込み、私の存在を忘れる。Bは毎日、どんな心の変化の中で、生活しているのであらう。そして、そうさせるものは何だらうと考えてみた。家庭生活も関係ありそうだが、（Aと同様に）どれだけ、私の心と体が、Bにだけ向けられ、触れ合うことができなかつたかと、疑問を、自分に投げかけてみる。實際は、目の前で言うBの要求に答えているだけで、見えない眞実の要求は、感じ取ることができなかつたと反省する。そして年長となつた。

Bにとつての発達（自分を出していくという点で）は、螺旋狀に回転しながら、やはりなだらかな坂を登つて来ていると思う。

女兒A・Bを發達の違ひを通して、私なりに考え、最初の問いに答えてみたいと思う。

Aは、幼稚園での一つ一つのでき事を、自分の目で見、耳で聞き、肌で感じて、自分のものとし、納得しながら、体に蓄えていった。これは真実なるもので、Aだけにしかない、“個性”というものが、生み出されていくと思う。そして率直に自分が出せれば、自然に生かされてゆく道も見つけられる。

一方Bは、一つ一つを精一杯にぶつかってゆくのだが、早く完成させてしまおうとするがために、大切な所を、さっと通り抜け、不安な思いをたえず、することに。しかしその不安を解決するために、安定の場所を求めて思考錯誤をし、また本当の自分を、取り戻すために出直さねばならない。何度も何度もくり返すうちに、真実が見えてきてBだけにしかないものが得られる。

ここで大切な所とはいったい、どんな所か、それは、子どもにはよく見える真実という所で、そこは、暗かったり、恐かったり、小さかったりするような気がする。(私の子ども)の時を、振り返ってみて)

子どもは、真剣に生きるからこそ、黙ったり、泣いたり、驚いたり、喜んだりする。私は、その真剣さに、どう向かい合ってきたかと改めて考えざるを得ない。投げかけられたも

のを、ありのままに受け入れ、時を逃さずびったりするものを返すことができただろうか。また、同時に、共感することができたろうか。時には、直観で反応し、時には、予測して答えていたように思う。これらは、保育者自身の体調も大きく影響するので、日常生活の中で、整えておくように心がけなければならない。

毎日の保育の中で、素通りしてしまいがちな私に、歩みを止めて考えさせ、文章化するという機会が与えられました。このことによって、私の物の見方、考え方が、少し整理され、深められたことをうれしく思います。

また、幼児に関することが、大人の世界で忘れかけていることを改めて気づくことができました。(新鮮な目で見て、率直に感動したり、疑問を持ったりすること)

これらは人として、大切なことであり、成長していくはずのものが、逆に鈍くなってきているというのは、悲しいことです。

私らしく生きるために、諸器官を、働かせ、何かあふれるものを持ちたいと思います。つまり、それが生かせるものになると信じるからです。

(埼玉・浦和母の会幼稚園)